

銅鏡展示の問題点 – 鏡面展示の試み –

高倉 洋彰

I 銅鏡展示は鏡背重視が主流

銅鏡を展示している博物館は多い。

そこでは一様に銅鏡の背面がみえるように展示されている。しかし、展示室で銅鏡をみた人が「どこに顔が映るの？」と首をかしげるように、顔を映すという銅鏡の本来の用途は鏡面にあるから、この展示法は問題がある。だからといってすべての鏡を、鏡面を向けて展示すると、円板の羅列になって、面白くない。

銅鏡をどう展示するかについてはいくつもの試行錯誤があつて、結果的に鏡背を重視した展示の原則が成立してきたのだろうけれども、そうではあつても現在の銅鏡の展示法には改善の余地が多い。たとえば、筆者の銅鏡に対する問題意識は「権威の象徴」としての銅鏡にある。それを例証する遺跡として著名な飯塚市立岩堀田遺跡出土の前漢鏡を展示する飯塚市歴史資料館の展示と解説パネルをみると、他の博物館と同様に銅鏡背面の文様意匠や銘文に関心が寄せられているように感じる。それはここでも背面の文様を中心的な課題としていると考えざるを得ない銅鏡展示になっているからである。

鏡背展示が重要な展示法であることは論をまたない。実際、鏡面ではなく鏡背文様に重要な意味をもつ鏡もある。中国では唐代に盤龍鏡が流行するが、盤龍鏡は皇帝に献上され、皇帝からも諸臣に下賜された。この贈答によって盤龍鏡は結果的に権威の所在を示すことになるが、献上・下賜された契機は李肇の『国史補』が述べるように、龍文をもつ鏡が百邪を払い、万物を映し出すという吉祥の意味をもっているからであった。このように盤龍鏡の場合は鏡背

文様に意味があり、したがって鏡背を展示する必要がある。その際、盤龍および盤龍鏡の意味の解説を怠ってはいけない。

盤龍鏡のような場合もあるが、銅鏡の主要な用途の1つである権威の象徴としての性格を鏡背重視の展示法から知ることは難しい。そこで鏡背展示ではない銅鏡展示もあることを、具体例で紹介しておこう。

漢代の日光鏡などに透光鏡とよばれる鏡がある。鏡背の文様に合わせて鏡面にわずかな凹凸を作り出し、鏡面に光を当てて壁などに鏡背文様を映し出すもので、高い技術力が要求される。同様の例に、キリシタン資料とされる魔鏡がある。西南学院大学博物館に非常に精巧に作られた魔鏡がある。一見すると普通の鏡だが、鏡面に光を当てると、壁に十字架にかけられたキリスト磔刑像とこれを拝む横向きのマリア像が浮かび上がる。

以上の説明で透光鏡や魔鏡を理解できるとは思えない。博物館は論文購読の場ではなく実物資料のもつ情報を眼に訴えて理解していただくための展示が主役だから、壁に浮かび上がった内行花文やキリス



図1 西南学院大学博物館の魔鏡展示

ト像、マリア像を実際に見てもらうのが一番わかりやすい。そこで西南学院大学博物館では魔鏡を図1のような装置を使って見学していただいている。鏡背文様を展示しながら上記のようにあるいはもっとわかりやすく解説しても要を得ないことになるが、こう工夫することによって一瞬にして魔鏡を理解していただける。加えて、魔鏡の場合は鏡背文様と反射光によって浮かび上がるキリストなどの像が異なることに意味がある。同じであれば、つまり鏡背にキリスト像があれば、キリシタンであることが白日になるからである⁽¹⁾。そこで鏡背と反射光で像が浮かび上がった鏡面文様を並列してパネル写真で紹介すれば、いっそう理解が進む。魔鏡の魅力を眼に訴えて理解していただくためのこの工夫が博物館の展示に必要であろう。

Ⅱ 権威の象徴としての銅鏡の展示法

銅鏡が権威の象徴としての性格を有していたことを博物館ではどのように展示し、理解できるように試みているのかを、身近にある銅鏡展示の宝庫の2館で実際をみておこう。

福岡県飯塚市の飯塚市歴史資料館には立岩堀田遺跡から出土した重要文化財の前漢鏡10面が展示されている。出土甕棺墓ごとに並べて展示されているが、いずれも鏡の背面を見るようになっている。保存状態の良い10号甕棺墓2号鏡のみは下面を円形に削り貫いた四脚台に乗せ、下にガラス鏡を置いて、銅鏡の鏡面が見えるように工夫されている。鏡背文様の構成や銘文の解説など、前漢鏡の魅力を十分に味わえる展示になっている。

しかし問題点もある。個別の銅鏡の説明はなく、パネルに「中国では鏡は単に化粧道具としてではなく、物の真性をうつしだすものとして呪術的な靈力のある神器とされ、辟邪や魔よけとして使用されました」とある。弥生時代中期後半の立岩堀田遺跡出土の前漢鏡の説明だから、同時代の中国での鏡の性格の説明と思われる。鏡の前身である鑑が『周礼』秋官司寇に祭祀のための道具であると記述されている

例などのように銅鏡の説明としては間違っていないが、先の解説が前漢鏡の性格を指すものであれば、前漢鏡に神器や辟邪・魔除けとしての性格があることは証明されておらず、この解説は大いに疑問がある。続けて「日本では、宝器や祭器あるいは権威のシンボルとして重用されました。6面の前漢鏡を出土した10号甕棺は嘉穂盆地を範囲とするクニの首長墓として考えられています。」とある。弥生時代中期の時期の銅鏡に宝器や祭器としての性格がまったくないことはなかろうが、基本的には威信財であることがすでに立証されている⁽²⁾から、ここでも解説内容に問題がある。その10号甕棺墓の副葬遺物は、銅鏡、青銅製・鉄製武器、装身具などと材質別にバラバラに展示されていて、10号甕棺墓の副葬内容の組み合わせは見学者が丹念にチェックしない限りわからないから、なぜ「クニの首長墓と考えられています」のかわからない。したがって、実物資料の展示を通して教育をする役割をもつ博物館で、日本で最高の前漢鏡資料をもっているにもかかわらず、解説で述べている内容、つまりこれらの前漢鏡が「化粧道具」「神器」「辟邪・魔よけ」「宝器」「祭器」「権威のシンボル」、あるいは「クニの首長墓」であることを理解できる展示になっていない。つまり、モノ(博物館資料)をみせるだけであって、情報の発信をしていないといえる。

飯塚市歴史資料館の展示を駄目と言っているわけではない。展示方法すなわち展示の意図と解説内容が整合していないことの指摘だから、鏡背重視の展示法や参考資料として展示されている西安出土前漢鏡の拓影などに合わせて、「銘文にあらわれた漢代の思想」などの銘文を重視した解説にすれば、情報の発信力は格段に増加する。しかし立岩堀田遺跡の意義を伝えることはできなくなる。

福岡県糸島市の伊都国歴史博物館の平原遺跡から出土した後漢鏡の展示は趣きを異にしている。展示室の中央に「平原王墓主体部復元模型」(実大)を置いて、棺の四周に破碎された状態での後漢鏡の出土状態を再現している。国宝に指定されている40面の後漢鏡は復元模型の両側などに展示されており、片方

の展示ケースの間に、立板の上部を円形の窓状に切り取った展示台を設け、復原した銅鏡が窓部で回転するように工夫されており、鏡の両面を居ながらに試みることができる。

展示室の壁面ケースには、糸島市にある三雲南小路遺跡や井原鍵溝遺跡の出土資料を展示し、「王のあかし」という解説パネルで、三雲の前漢鏡57面やガラス璧、金銅四葉座飾金具が前漢皇帝から王侯級の人物に下賜されたことによって王としての権威が生じたことを説明している⁽³⁾。したがって伊都国歴史博物館は展示にとどまらず適確な情報を発信しているといえる。

伊都国歴史博物館の解説にはなかったが、平原王墓の銅鏡については、『日本書紀』仲哀天皇八年条に参考になる記事がある。「又筑紫伊都国主祖五十迹手、聞天皇之行、拔取五百枝賢木、立于船之舳艫、上枝掛八尺瓊、中枝掛白銅鏡、下枝掛十握劍、参迎于穴門引島而献之。」がそれで、筑紫国の伊都(伊都)県主の祖先である五十迹手(いとて)が仲哀天皇の九州下向を知り、船の舳(船首)と艫(船尾)に「五百枝賢木」を立て、枝の上方に「八尺瓊」、中ほどに「白銅鏡」、下方に「十握劍」⁽⁴⁾を掛けて、下関市彦島と思われる穴門引島まで出迎えに行きそれらを献上したとある。同様の方法で岡県主の祖先である熊鰐も天皇を出迎え、忠誠を誓っている。五十迹手は鏡・劍・玉の献上の意図を語っているが、曲線的でたおやかな形の勾玉である八尺瓊に天皇が人民を慈しんで支配されるよう願う意義を込めており、白銅鏡(ますみ=真澄の鏡)には山川海原に通曉し事情を掌握しての国土支配、まつろわぬ民を武器(十握劍)・武力で討伐し天下を統一されるよう願ったことであるという内容になっている。鏡・劍・玉の組み合わせは皇位継承に必要な三種の神器に通じていることや服属儀礼の説明であることからみて、白銅鏡および劍・玉の献上は地方豪族の降伏つまり支配権の放棄を意味しており、銅鏡が権威の象徴と考えられていたことを示している。これを敷衍すれば、平原王墓の銅鏡が意図的に破碎されていた理由の推測も可能になる。

伊都国歴史博物館では、平原遺跡出土銅鏡のレプリカを動態展示し、鏡を回転させることによって背面文様と鏡面の相違を理解させる努力をしている。わかりやすい展示だが、「権威の象徴」としての役割は今ひとつ発想できない。実は、常設展示室を出たところに、「弥生人(女王復元)」と題して、煌びやかな衣服をまとった女性マネキンが展示されている。このマネキンを活用し、島根県古浦遺跡の前額部に緑錆のある例を根拠に、マネキンの額に銅鏡を飾って輝かせるのは1つの方法だろう。あるいは円形である銅鏡は太陽を彷彿とさせ、その反射光もまた太陽をイメージさせるから、太陽を掌中に収めた王者ということで、マネキンの手に光り輝く鏡を持たせるなどの工夫も展示法としては面白い。要は鏡面の光輝を強調することである。このような王のマネキンを展示室に置き、権威の象徴であることを解説し、賢木に劍・玉とともに銅鏡を吊り下げるのも意味があり、支配権の放棄として鏡を破碎する場面を設けるのも、鏡の性格の理解を容易にさせよう。そうすると衣服や賢木の考証などの新たな問題も生じるが、銅鏡展示の方法としては簡単なことである。

Ⅲ 化粧道具としての銅鏡の展示法

権威を象徴する道具としての銅鏡の役割を理解していただくための展示法を考えてきたが、そもそも銅鏡は化粧の道具として発生する。したがって銅鏡に顔が映ることを理解していただくことも必要である。

鏡の起源がいつにあるかはまだはっきりしないが、商(殷)代の銅鏡が知られているからその成立は相当に古い。それは、当時、男性が官僚として出世する条件の1つに、美男である必要があったことに起因すると思われる。美男でない男が美男になるためには化粧し変身せざるをえないからである。

当時の男性は髭面だったので化粧の面積は狭く、化粧での美男化を可能にしていた。化粧をするには自分の顔を確認する必要がある。たとえば、『莊子』徳充符に「人莫鑑于流水、而鑑于止水」(人は流れを鑑とすることなく、止水を鑑とする)とある。鑑と

いう字の「監」は容器に水を盛って水面をかがミとしている様からきていることの証左になろう。普通、川や池などの水面に顔を映して化粧をしていたが、流れでは映りが悪いうえにそれが近くにない場合には苦勞することになり、室内に洗面器状の土製あるいは青銅製の水盆を用意し、それに水を張って、顔を映すようになった。それが鑑(かがみ)である。しかしそれでも不便なので、持ち運び可能な銅器を考案した。それが鏡(かがみ)である。銅鏡の背面に文様があるのはそのためであり、鈕や乳は鑑の足の痕跡にはかならない、と郭沫若が説いている⁽⁵⁾が、妥当な見解であろう。

顔を映す必要性、化粧を上手くほどこす必要性が、底が平直だった鑑に由来する平板な戦国鏡から、前漢鏡を凸面に変える。凸面であれば、マジックミラーのように顔の全体を映し出すことができるとともに、近づければ顔の部分のアップが可能になるからである⁽⁶⁾。

加えて言えば、化粧は人の背面にも及ぶから、合わせ鏡が必要になる。両手に鏡を持てばよいが、それでは化粧ができない。そこで鏡台に鏡を置き(図2)、片手に持った鏡で背後の様子を鏡台の鏡に映して化粧する。化粧の簡単な手直しには携帯した鏡を用いる。ここに銅鏡に大中小がある理由がある⁽⁷⁾。

このように、銅鏡が化粧の道具であることを明示するためには、銅鏡の鏡面、それも顔の映る鏡を展示する必要がある。銅鏡の多くは緑錆に覆われている。緑錆自体が貴重な考古資料であるから銅鏡の鏡面を磨くことに抵抗があり、それを磨くのではなく、顔を映すための銅鏡にはレプリカ(複製品)を利用すればよい。伊都国歴史博物館では先に紹介をした展

示室の一隅に「よみがえった銅鏡」のコーナーを設け、鏡面を磨いた方格規矩鏡と内行花文鏡のレプリカを台の上に置き、

「これは、平原王墓から出土した銅鏡を再現したものです。今は錆びて黒っぽい色をしていますが、当時はピカピカと輝いていたことがわかりでしょう。さあ、手にとって顔を映してみてください。そして古代の輝きを体感してください。」

と案内している。目の前の銅鏡を実際に手に持ち、この案内を読めば、誰でも顔を映してみたいくなるのではなからうか。飯塚市歴史資料館にはそうした配慮が無い。実は、この館では顔が映るように磨かれた現代版銅鏡がミュージアム・グッズとして売られている。これを銅鏡展示室の一隅に置けば、銅鏡に明瞭に顔が映ること、化粧の道具として十分に活用可能なことを理解していただける。費用をかけることもなく、わかりやすい展示が簡単に実行できよう。

IV 辟邪のための道具としての銅鏡の展示法

先に唐代の盤龍鏡には百邪を払い、万物を映し出すという吉祥の意味があることを紹介した。このうちの辟邪、その結果としての吉祥への願望が鏡に込められる例は現代中国にある。

雲南省西双版纳タイ族自治州には多くのタイ族仏教寺院がある。そのうちの勐海県のクラチャタン寺の景真八角亭を1991年に訪れたが、壁に魔除けの鏡が飾られていて、タイ族には鏡を辟邪に使うという習俗があることに関心をもった。

この習俗は漢族にもある。1999年に浙江省上虞市にある小仙壇窯跡を踏査した際に、近くの石浦村でいくつかの家の2階に簀に鏡と鉞を結びつけ飾っている家を見かけた(図3)。もしかしたらこれは魔除けではと考え尋ねてみると、鏡で魔物を照り返し、鉞は魔物を切断するためのものと説明された。魔物を切れればよいのだから、鉞の代わりにナイフなどの刃物でも構わないともいっていた。昔はどこにでもあった習俗で、文化大革命のときに悪弊として否定され忘れ去られていったが、石浦村には紅衛兵が



図2 顧愷の「女子箴図」(宋)にみえる化粧の光景



図3 魔除けの鏡と鈺
(中国浙江省
上虞市石浦村にて)



図3の点線部拡大

あらわれず、旧習が伝わっているとのことだった。その後、雲南省楚雄市でも手形や呪文などを書き込んだ赤い布の前に円形のガラス鏡が垂れ下げられているのを見た。映画「芙蓉鎮」の舞台になった湖南省永順県芙蓉鎮では住宅入口の扉の上部に柄を上にして柄鏡そのものが下げられていた⁽⁸⁾。石浦村のものと形態は異なるが、これらも魔除けということだった。いずれも漢族で、鏡の反射光が邪悪なものを撃退する効果があると考えられていることが理解できる。

辟邪としての銅鏡を考える文献・考古資料は春秋戦国時代の中国や原三国時代の韓国に参考になるものがある。

韓国原三国時代の銅鏡(凸面鏡)には出土状態の明らかな例が少ないが、慶尚南道良洞里遺跡はそれが明らかな貴重な例になる。10面が副葬されていた

162号木棺墓では銅鏡は2群に分けて置かれており、腰の部分に横並びに置かれた1群と頭部付近に置かれた1群があった。427号木棺墓から出土した3面も腰の部分に横に並べるようにして置かれていた。腰に横並びに置かれた状況は、『左伝』莊公二十一年条や定公六年条にみられる「鞶鑑」を思わせる。「鞶帯而以鏡為飾也、今西方羌胡猶然、古之遺服也」(鞶帯は鏡で飾られた帯である。今でも西方の羌や胡は依然として、古式の服装を残している)とする杜預の注釈があり、良洞の鏡が帯飾りであった可能性を示している。

ここで紹介した例はこのままでは辟邪を意味しているということとはできない。ただ、銅鏡の反射光を辟邪に使うという習俗が東アジアに広くみられるシャーマンにあることが参考になる。シャーマンは銅鏡や小銅鐸(鈴)を衣服に縫いつけ、激しく踊る。そこで鏡や鐸が擦れ合って音を出す、鏡の場合にはピカピカ光る乱反射の効果もある。衣服に銅鏡を綴じ込んだシャーマン服の好例は九州国立博物館にある。この服装がいつまで遡るかはわからないが、帯とはいえ先の『左伝』では鏡で飾る羌族や胡族の服装を古俗といっているから、さらに遡ることになる。

鏡の反射光が邪悪なものを撃退するという観念は現代の日本にもあり、京都八坂神社の祇園祭や太宰府天満宮の秋季大祭である御神幸式などでは、神輿の周囲に銅鏡が吊り下げられている。太宰府天満宮の神輿を拝見させていただいたことがあるが、黒漆塗りされ屋根に鳳凰を飾った神輿の垂幕に銅鏡が吊り下げられていた。和鏡を用いて、円形の鏡面を光り輝くように磨き、人目に触れることの無い裏面にも梅紋を主文とする鏡背文様が鋳出されている。和鏡だから鈕が無い、鏡縁の内側に4孔を空け、紐で3面をセットにして吊り下げている。この神輿は1904年に造られているが、1853年に製作された「御神幸式絵巻」(嘉永本)にもそっくりの神輿が描かれていて、やはり鏡を吊り下げている。神輿の四周に銅鏡を吊り下げる習俗の起源や開始がいつなのか知らないが、平安時代後期に後白河天皇の命で作成されたとされる『年中行事絵巻』に鏡を吊り下げた神輿が描かれているなど、神輿の垂幕に銅鏡を吊

り下げる習俗はかなり古い段階からはじめていたのではないかと考えてしまう。そう考えさせる資料がある。

長崎県対馬島の南端に近い佐須の久根田舎銀山上神社に6面の銅鏡が収められている⁽⁹⁾。面径5.5～6.0cmほどの小形の鏡で、狭縁の内側に目の粗い斜行櫛歯文帯をめぐらす。内区に文様は認められないが、2面には乳が4箇所にある。全体から受ける印象は弥生時代小形仿製鏡に通じるものがあり、報告書も「これ(筆者註：銅矛)とともに保存されている鏡は初期の仿製鏡であろうか」としている。ところがこれら6面には鈕が無い。鈕が欠けているのではなく、最初から作られていない。そこで各々の鏡縁内側の斜行櫛歯文帯の部分に3孔を穿って、吊り下げようになっている、太宰府天満宮の神輿に吊り下げられた銅鏡と通じている。

銀山上神社蔵鏡と同様の例は報告されていないが、弥生時代小形仿製鏡の儀鏡化と通じるものがあることが注目される。小形仿製鏡のなかには古墳時代になると極端に小形化し、直径3cm前後あるいはそれよりも小さな、無文のボタン状になるものがある。これらは祭祀遺構から出土するのが通例で、神事の際に奉納する儀鏡と考えている⁽¹⁰⁾。同様に神事に際して、権威の象徴化をもたらした主要な要因の1つの反射光に邪惡なものを撃退する効果があると考え、辟邪の道具として銅鏡の使用がはじまったのであろう。銅鏡ではなく無文の円板が吊り下げられている例もあるかもしれないが、あるとすれば人目に触れない背面の文様が不要になり、専用の円板へと変化したもので銅鏡状円板といえる。ともあれ銅鏡が辟邪の道具として活用されていく過程の端緒

を示唆するのが銀山上神社蔵鏡で、辟邪の思想形成にあたって韓族の銅鏡で飾る腰帯や背中・胸に銅鏡を綴じ付けたシャーマンの服装が大きなヒントになったと思われる。

銅鏡の辟邪のための道具としての性格をいろいろと論じてきたが、展示法としては、シャーマンの服装にレプリカの銅鏡を綴じ付け、あるいは神社の神輿を置けばそれでよい。神輿の場合もレプリカの使用で十分目的を達することができる。鏡面を外側に向け、反射光がピカリと光るようにする工夫があればもっと良い。

V 鏡面展示の勧め

Ⅱ～Ⅳに共通するのは、鏡の性格や使用目的が鏡背ではなく光り輝く鏡面によって理解できることにある。そうはいっても、光り輝こうとも鏡面はただの円板、しかも多くの場合緑錆に覆われて顔を映すことはできないから、鏡面そのものからは時代性や製作者・利用者の銅鏡に込めた思いなどをうかがうことはできない。それができるのは鏡背の意匠や銘文などからであるから、現在の展示法には優越性が認められる。しかし鏡背展示では銅鏡の果たした役割を知ることができないのも事実である。Ⅱ～Ⅳで紹介したレプリカ活用の鏡面展示法はあまり場所をとることもなく、また実物でなくても再現可能である特色がある。そして何よりも、これによって意義が正しく理解されることが、重要である。

銅鏡の生命は鏡面にあることを忘れてはならない。

註

- (1) 透光鏡で説明したように、魔鏡の場合も鏡背文様に合わせて鏡面にわずかな凹凸が生じるのだから、鏡背文様が映写されることになる。しかし西南学院大学博物館蔵鏡例は鏡背文様と映写像が異なっている。技術的に可能なかを考えていたところ、2面の鏡を合わせているのではという指摘があり、九州国立博物館で分析していただいたが、確かに2面が重ねられていた。
- (2) 高倉洋彰「墳墓からみた弥生時代社会の発展過程」(『考古学研究』78)、考古学研究会、1973年
高倉洋彰「前漢鏡にあらわれた権威の象徴性」(『国立歴史民俗博物館

研究報告』55)、国立歴史民俗博物館、1993年

- (3) 前漢皇帝から銅鏡などの葬具を乗輿制度にしたがって下賜される「王侯級」の人物は、皇族や功臣であって、倭人は該当しないからこの解説は誤っている。ただ、漢に服属した蕃国の王にも葬具は下賜されるから、この場合は「王侯級の人物」ではなく「蕃国の王」に下賜された葬具にあたる。
- (4) 十握は握り拳10個分をさすから、80～100cm前後の長さの剣ということになる。剣は刺突用の武器であり長いと使用に支障が生じるから、80cmを超えるような長剣はみられない。剣を両刃の刀とすることがあり、『万葉集』巻五の八〇四歌にも「丈夫の 壮士さび

すと 剣太刀 腰に取り佩き」の用例があるから、ここでは大刀を意味していると考えられる。

- (5) 郭沫若 1959「三門峽出土銅器二三事」(『文物』1959年第1期)、文物出版社
- (6) この点からすると、凹面鏡である朝鮮半島の多鈕細文(粗文)鏡は、顔を映すという鏡の持つ本来的な意義からみて鏡ではない。実際、凹面鏡は光を集め火を起こす道具である陽燧として、中国では鏡と区別されている。実際の使用法は4年に一度のオリンピックの採火式の映像で見られるようなものである。ただし、凹面鏡も鏡の一種であるから、多鈕鏡に鏡字を使うことを間違いといっているわけではない。

- (7) 漢代の銅鏡の出土状況を点検すると、大形鏡は王族や高級官僚など高位の人物の墓にあり、中小形の鏡は中下級官僚の墓から出土するから、身分(権威)を象徴している。しかしながら宋代になって柄が付くようになるころから、鏡台に架ける大形鏡に対して手持ちの中形鏡、懐中用の小形鏡になってくる。
- (8) 北九州市立大学外国語学部の金縄初美准教授のご教示による。
- (9) 水野清一編『対馬』(東方考古学叢刊乙種6)、東亜考古学会、1953年
- (10) 高倉洋彰「儀鏡の誕生」(『考古学ジャーナル』446)、ニューサイエンス社、1999年